

## 「歴史の上書き」と「文学」「言語」の位置について ——現代ロシアのコカサス表象(II)——

中村唯史

### 1

ソヴィエト連邦解体後の1990年代に旧ソ連各地で起きた民族間の衝突や軋轢のなかでも最も激しいかたちをとったのは、事実としては戦争にほかならなかったチェチェン紛争だろう。民族間の緊張はチェチェンだけでなく、アブハジアほかコカサスのほぼ全域を覆ったから、ロシアのジャーナリズムが1990年代を通してコカサス問題をしばしば取り上げ、その際にこの地名が旧ソ連地域におけるアイデンティティの危機や混乱を象徴する言葉として機能したことは、ある意味で当然だった。

現代ロシアのジャーナリズムによるコカサスへのアプローチは、大きく2つに分類できる。第1は時事的なアプローチで、進行中のチェチェンやアブハジア他の紛争に関する論説やルポルタージュなどがこれに当たる。「兵士の母たち」のひとりとして、教え子をロシア軍から脱走させるべく戦地に向かった際の経験をつづったエヴァ・リシナ『戦闘を前にしてブランコに乗って：チェチェン日記』(\*1)のような反戦的・厭戦的なものから、ロシア軍兵士の写真やグロズヌイ市街戦の戦術の図解、紛争時に使用した武器の解説などを満載した『チェチェン1994-2000』(\*2)のような好戦的でマニアックなものまで、紛争に関する文章は、さまざまな立場から、とくに戦闘が激化した1990年代半ばをピークとして、枚挙に暇がないほど書かれてきた。

これに対して第2のアプローチは、諸紛争の淵源を探るべく、ロシアとコカサス諸民族との関係の変遷を辿り直すことを目的としていた。このような「歴史の見直し」の機運には、ある共通した顕著な志向が指摘できる。現代の視点からのあからさまな分析や解釈をまじえずに「実像」や「事実」を提示する、言い換えれば「資料」そのものに語らせようとする志向である。

この志向は、おもに19世紀コカサス戦争に従軍したロシア軍将校や士官、外交官などの回想録や報告が多数復刻出版されるというかたちとなってあらわれた。たとえば1836年から1838年まで山岳民の捕虜となった経験を持つトルナウの回想録や、19世紀半ばに発表されたサモイロフのチェチェン人に関するレポートなどは、専門家のあいだでは以前から貴重な歴史資料として高く評価されながら、これまであまり人目に触れることがなかったのだが、それらが単行本として続々と刊行された(\*3)。もちろんロシア-コカサス関係についての歴史的・民俗学的な研究論文や書籍も少なからず出版されてきたが(\*4)、それらも大半は資料に基づいた実証的な傾向のものであった。

現代ロシアの「歴史の見直し」の機運において、このように「事実」を重視する志向は、多くの場合、それは歴史を「客観的」に直視しなければならないからだという動機づけを与えられていた。たとえば1995年12月号から「ロシアとコカサス」という特集欄を設けている「ズヴェズダ」誌は、同欄を始めるに当たって、その意図を次のように述べていた。

過去における、これほどまで常軌を逸したできごとには無知なままではいられず、不可避免的に奇形な神話が生じてくるだろう。人々に破局的な解決策をとるようにながすのは、このような無知である。(\*5)

ソヴィエト時代の情報統制の結果、ロシア（ソ連）の人々の歴史観には空白や認識の歪みが少なからず生じている。我々は今後コーカサスについてこれらの空白を埋め、歪みを正すべく、「事実」を発掘し提供するから、読者はその「事実」から学んでほしい——「ズヴェズダ」誌の趣旨はそういうことであろう。たしかに、その後現在まで断続的に続いている「ロシアとコーカサス」欄には、発掘された回想や外交文書、報告書などでなければ、資料に基づいた実証的な論文ばかりが掲載されてきた。

「ズヴェズダ」誌の「ロシアとコーカサス」欄は、批評家のヤコブ・ゴルディンの提唱を受けて始められた。彼は後に同誌編集部の一員となり、今にいたるまで、この欄に依りつつ現代ロシアにおけるコーカサスの「歴史の見直し」に主導的な役割を果たしている。けれども当初の宣言にもかかわらず、ゴルディンらの努力が「奇形的な神話」の発生を食い止め、「客観的な」歴史像を構築してきたと言うことはできない。

「ロシアとコーカサス」欄は、当初から現代の紛争の原因を過去に探ることを目的として、関心を19世紀コーカサス戦争に集中させてきた。同欄はこの戦争に従軍した人々の回想や報告を主として掲載し、論考もコーカサス戦争時の戦術問題・外交問題を主題としたものが中心であった。また依拠する資料は、もっぱらロシア側の将校・兵士・官吏等の回想や報告書などであった。

この欄をたどっていると、あたかもロシアとコーカサスが、たえず戦闘状態にあったかのような印象を受ける。このことは、同欄に掲載された論考・回想を「ズヴェズダ」社がまとめて刊行した一連の書籍の表題——『コーカサス：大地と血。19世紀コーカサス戦争におけるロシア』『コーカサスの包囲：19世紀コーカサス戦争参加者の回想』『ロシアとコーカサス：2世紀を通して』『コーカサス戦争：起源と始まり。19世紀コーカサス戦争参加者の回想』（\*6）——などからもうかがえよう。

「事実」に語らせるというゴルディンと「ズヴェズダ」誌の路線は、もっぱらロシアとコーカサスが戦争状態にあった19世紀をクローズアップすることにより、「神話」を打ち崩すどころか、むしろ「コーカサス神話」——「ロシアーコーカサス」の二項式——を強化してきた。この結果は、あからさまに現代の視点から解釈を施したり、声高に何らかの主張を唱えたりするのではなく、回想等の資料を用いた隠微な操作によって得られている。「ズヴェズダ」の戦略は、「ロシア」と「コーカサス」の二項対立に「客観性」の外貌を付与しつつ、これを読者の意識裡に固定化することだったといえる。

もちろん「ズヴェズダ」誌のこの戦略が19世紀コーカサス戦争に関心を集中したことによる巧まざる結果なのか、現代チェチェン問題に対するロシア世論の風向きの変化を反映した意図的なものなのかを、最終的に判断することは困難である。またおそらくその必要もないだろう。確かにいえるのは、この問題についてジャーナリズムを主導してきた「ズヴェズダ」誌の「歴史の見直し」が、いずれにせよ進行中のチェチェン紛争の経過と相関しつつ、いわば「歴史を上書きする（再構成する）」試みにほかならなかったということである。

## 2

このような現代ロシアにおける「歴史の見直し＝上書き」のなかでとくに注目に値するのは、2000年に刊行された『ロシアの心の中のコーカサス』（\*7）である。この本は初版から5000部という今のロシアの出版事情のなかではかなりの部数が発行され、その後すぐに10000部が重刷された（ちな

みに「ズヴェズダ」のコーカサス関係の本はどれも初版3000部)。当然、政治的・社会的な反響も小さくはなかったであろう。本の出版を記念して2001年3月12日にロシア作家同盟主催のシンポジウムが開かれたことは、こうした反響の一例である。(\*8)

序文が大統領補佐官によって書かれ、文献収集に際してロシア国立図書館(旧レーニン図書館)が全面的に協力するなど、この本の刊行がなかば国家的事業としての体裁を帯びていたことも注目される。序文を書いたヤストルジェムブスキイは、2000年11月にチェチェンを訪れた際に、チェチェン政府指導者やグローズヌイ市長に『ロシアの心の中のコーカサス』を贈り、この本を政治的に利用する動きを見せた。(\*9)

編者のひとりであるウラジーミル・デシャテリクは、上記のシンポジウムにおいて、この本が基本的には彼ともうひとりの編者であるヴァディーム・デメンチェフの発意によること、文献収集に当たってロシア国立図書館から得られた協力も自発的なものであったこと、ヤストルジェムブスキイ補佐官が序文を書いたのは、原稿が整ったあとで出版のスポンサーを探していた際に彼が個人的に賛同し、全面的に援助してくれた経緯によることなどを強調している。この本がロシア政府から自立的に発案されたというデシャテリクの説明は、おそらく事実に即しているだろう。けれども刊行後のヤストルジェムブスキイの動きなどから見ても、この本が国家にとって好ましい内容のものであったことは疑えない。

ではそのような『ロシアの心の中のコーカサス』は、いかなる方針に基づいて編まれているだろうか。デシャテリクは上記のシンポジウムにおいて、自分たちの意図を次のように述べている。

あたかも……間断なく戦争が続いているような表現は、まったく真実に反していると私たちに思われました。……決裂や戦争や会戦について果てしなく語り続けていてはならないことは明らかでした。現在の世論には、ロシア文化とコーカサス諸民族の文化とのあいだに何世紀ものあいだ存在してきた密接な関係についての理解が、事実上完全に欠落しています。たとえば作曲家のタネーエフが、コーカサス滞在中に無数の山間集落を訪ね歩き、民族楽器の収集に努め、ルミャンツェフ博物館で北コーカサス諸民族の楽器の展覧会を開催したというようなことが。

間接的な表現ではあるが、これは「ズヴェズダ」誌などに対する批判である。ただしこの批判が、第1節でみたような、ゴルディンらの路線がはらむ2つの契機(「資料」「事実」の発掘を通じて/「ロシアーコーカサス」の二項対立を強調・固定化する)のうち、もっぱら後者に関するものであることには留意しなければならないだろう。歴史学の博士号を持つデシャテリクは、あたかも「資料を通して歴史を上書きする」ことについては自明視しているかのようである。

『ロシアの心の中のコーカサス』の「歴史の上書き」は、「ズヴェズダ」の場合よりもはるかに露骨なかたちをとっている。「ズヴェズダ」において「資料」は、多くの場合その全文が掲載され、抜粋の場合にも引用部が原資料のコンテキストに占める位置について言及があるなど、原著者の意図があるままとりをもって読者に提示されるようにとの配慮がなされていた。二項対立への読者の誘導は、あくまでも資料それ自体の取舍選択や、刊行者の書いた序文によって行なわれていた。

これに対して『ロシアの心の中のコーカサス』では、どの原資料も任意に分割され、章別を越えて多いものだと10ヶ所近くに散らばって引用されている。この本の編者たちは原資料のコンテキストを破壊し、その結果断片と化したテキストを自らの意図に沿って配置し直すことによって、新た

な歴史像を構築しているのである。さらに、テキストのひとつひとつに原資料にはない小見出しが新たに付けられているが、このことなどは文字どおりの「上書き」と言わなければならないだろう。

ではこのような露骨な「上書き」によって、この本が読者に提示している「歴史像」とはどのようなものか。冒頭にある「序文」と「編者から」を除く、各章の表題を列挙してみよう。「民族と種族の古の棲家」「ロシアの南部前哨線：山岳民と共に異国からの侵略者に抗して」「外国の煽動者との戦い」「何世紀にもわたる調和と友好の中で」「われらが共通の痛み」「コーカサスの鎮定：歴史的帰結」「山岳民の記憶に残るロシア民衆の私欲なき援助」「コーカサスはロシア文学の揺籃のひとつ」。

もう少し細かく、既述のとおり編者たちによって引用テキストに新たに付された小見出しを、任意に挙げてみよう。「ロシアはいかにしてトルコの侵攻から山岳諸民族を護ったか」「ペルシャの征服者はいかにしてコーカサス諸民族を根絶したか」「19世紀のコーカサスにおいて英国とフランスの拡張政策はいかにして実行されたか」「チェチェン人とイングーシ人がツァーリ権力を自発的に認めたのはいつか」。

資料・文献のコラージュであるこの本において、編者たちの創意はもっぱら文献の配置のしかたにあるのだから、本稿において個々のテキストの内容にまで立ち入る必要はないだろう。この本が読者に提示しているのは、たとえば大動乱時代に偽ドミトリー一派に抗してロシアに協力した中にコーカサスの公や兵士が少なからずいたこと、ペルシャ・トルコ・英仏などの苛酷な侵略からコーカサスを護ったのがロシアであったこと、19世紀を通じてロシアがコーカサスの奴隷制度の根絶・産業育成・文明開化に大きな役割を果たしたこと等々、つまりはロシアとコーカサスとの友好の歴史である。ロシアの対コーカサス政策の一面性を批判する文書も一部に使用されているとはいえ、この本は全体としては、両者のあいだに起きた19世紀の戦争が、長い友好と共闘の歴史のなかで一時的かつ一面における現象に過ぎなかったことを強調している。編者たちは時代を10世紀まで遡り、戦争以外の分野にも目配りすることによって、19世紀の戦史のクローズアップを通して「ロシアーコーカサス」の二項対立を固定化したゴルディンらの歴史像に対するアンチテーゼの形成を図ったのであるといえるだろう。

ただし、本書における二項対立の解消は、ロシアによるコーカサス支配を是認することと同義である。たしかに編者デメンチェフの「刊行されたこの本のかかなりの部分がチェチェンに送られ、ロシア軍兵士や、またロシア人であれチェチェン人であれ一般市民に読んでもらえることを私は望みます。けれどもそれ以上に重要なのは、ロシアに住むすべての人にこれ（ロシアとコーカサスの友好と共闘の歴史）を知ってもらうことです」というシンポジウムでの発言からは、自分が編んだ本をロシアとコーカサスのあいだの架け橋にしたいという真摯な願いが感じられる。けれどもその橋は対立する二項のあいだに架けられた中立的なものではなく、「ロシア」によって架けられ、そのことによってそれ自体が支配の構造を内包している。架け橋を渡河した「ロシア」はいつしか膨張して、「コーカサス」をその中に包含している。

ヤストルジェムブスキイ大統領補佐官の序文は、このことについて、明快な三段論法で次のように述べている。

ロシアはヨーロッパ文明とアジア文明の両方の伝統を受け継いできた。（ロシアにおいては）これらの偉大な文明の相互浸透とジンテーゼ形成の複雑極まりないプロセスが、何世紀にもわたって生じてきた。……文字どおり一切において、コーカサスはロシアの過去および現在と密接かつ有機的に結びついている。コーカサスはロシアの歴史の一部である。

ただし、編者デシャテリクとデメンチェフや、シンポジウムに集まった人々が、ヤストルジェムブスキイに対して微妙に距離を置いていることもまた一面の事実ではある。彼らは陰に陽に、この序文に対して抵抗を示している。たとえば当初この本の企画に協力し、最終的には編集から降りたダゲスタンのガムザト・ガムザートフは、「ヤストルジェムブスキイの序文においてさえ、チェチェンに関するすべての政策が、ロシアの領土的な統一と全一性のための戦いという後光を背負っているかのようだ」と、シンポジウムの席上で批判をあからさまに口にしている。

同様の違和感は、ガムザートフほど明快なものではないとはいえ、『ロシアの心の中のコーカサス』中の「編者から」にも滲み出ている。

私たちは、過去の諸事件を評価するに際して、冷淡な客観主義へと陥ることを許されてはいない。ほかでもない本書においてこそ、一方ではこれまでの世代の二千年にわたる経験を考慮し、他方では遠い未来へと続く道を敷設する、歴史に対する国家的展望に基づいた方法論に則るのではなければならない。

この一節は、その直前にあるヤストルジェムブスキイの序文で強調されている「客観的な情報」「正しい歴史地図」といった表現と鋭く対立している。憶測を逞しくするならば、刊行されたこの本は、おそらくスポンサーの意向によって、編者たちが当初構想していたのとは微妙に異なるかたちになっているのではないか。ロシアとコーカサスとの平和を訴える本書が、特定の意図の下に行われた「歴史の上書き」にはかならないことを率直に認めているこの文に、事実上のスポンサーである政府に対して妥協を余儀なくされたことや、平和への希求が支配の構造と共犯関係とならざるをえないことに対する編者たちの苦渋を見てとることは、深読みに過ぎるだろうか。

### 3

上述の『ロシアの心の中のコーカサス』をめぐるシンポジウムにおける発言者の立場は、「ズヴェズダ」誌の営為を批判するに際して「ロシア軍への全面的な誹謗である」ことを理由にあげた軍事ジャーナリストがいる一方で、大統領補佐官によって書かれた「序文」の政治性を批判する者もいるといった具合で、必ずしも一枚岩であったとは言えない。また多くの発言の裏に平和と支配との共犯関係に対する苦渋が感じられることは、既に述べたとおりである——それゆえにこそ、この共犯関係が強引に正当化されている場合も少なくないとはいえ。

けれども出席者の誰もが一樣に、また苦渋を伴わずに、これこそはロシアとコーカサスとの架け橋となるだろうと信じて疑わないものがある——「文学」と「言語」である。

このシンポジウムが何らかの政治センターではなく、ロシア作家同盟で開かれていることが、私は気に入っています。芸術、文化、文学こそがチェチェン問題を解決するうえでのイデオロギー的な基盤にはかならないからです。『ロシアの心の中のコーカサス』が切り開いた方向性の続きとして、「コーカサスについてのロシア文学・評論」という名称のシリーズの刊行を私は考えています。(ガムザト・ガムザートフ)

力点は何よりもまず言語に置かれるのではなければなりません。ここで私が視野に入れている

のは、私たちと皆さんが語り合うのに何世紀にも渡って用いてきたすべての言語(все языки)です。言語(язык)こそは、人の心と心のあいだに橋を架ける際に最も希望ある素材です。(ミハイル・アレクセーエフ)

「文学」と「言語」に対するこの限りなき信頼は、『ロシアの心の中のコーカサス』の編者たちにも共有されている。それは、この本の最終章がもっぱら文学に捧げられていることにあらわれている。「コーカサスはロシア文学の揺籃のひとつ」と題したこの章には、プーシキン、レールモントフ、ベストゥージェフ＝マルリンスキイ、トルストイなどコーカサスに言及した近代ロシア文学者たちが登場しているが、その最後にコーカサス系詩人カイン・クリエフに宛てた、ロシア人詩人ドミートリイ・ケドリンの1945年の詩が引用されていることは、示唆的である。

私はニコライの兵士  
君はシャミーリのミュリッド だが私たちの頭上には  
不朽の光がある。  
私は知らない、バルカル語で  
“詩人”とはどのように書くのかを。  
(中略)  
豎琴のために乾杯しよう  
そして友情のためにも、クナーク(義兄弟)よ!

最終章の末尾という配置は、いうまでもなく、この詩が『ロシアの心の中のコーカサス』という本全体を締め括っていることをも意味する。編者たちが願う「平和」、別言すれば「ロシア(ニコライの兵士)ーコーカサス(シャミーリのミュリッド)」という二項対立の解消は、最終的には、両者を分かっ境界の上に輝く「不朽の光」＝「詩人(豎琴)」に託されているのである。

けれども、少なくともロシアとコーカサスをめぐって「文学」や「言語」もまた支配の構造を内包していることは、スーザン・レイトンの名著『ロシア文学と帝国』(\*10)を待つまでもなく、指摘できるところである。たとえば上記の詩で、ロシア人の「私」は、「詩人」という言葉をバルカル語でどのように書くか「知らない」が、ロシア語で書かれたこの詩は、поэт という語が“詩人”を意味することをコーカサス系のクリエフが「知っている」ことを前提としている。同様に先に引用したアレクセーエフの発言も、「言語」という語を一度は複数形で用い、その後ただちに単数形に言い換えている点が注目される。「私たちと皆さんが語り合うのに何世紀にも渡って」用いられてきた言語が、シンポジウムにおけるのと同様にもっぱらロシア語であったという事実は、動かしようもないのである。

『ロシアの心の中のコーカサス』の編者や支持者たちは、ロシアとコーカサスの関係のこのような非対称性について、あきらかに敏感ではない。「平和」と「支配」の共犯関係にはおそらく意識的だった彼らも、問題がこと「文学」や「言語」となると、それを一気に「不朽の星」へと昇華してしまっている。20世紀を通じて世界でほとんどソ連インテリゲンチヤだけが維持してきた「文学」の形而上性や超越性、また「政治」からの自律性に対する絶対的な信頼が今なお機能しているかたちである。これらの信頼は、ソヴィエト体制崩壊後の市場経済の荒波のためにロシアにおいても揺らぎつつあるが、「政治」に対するアンチテーゼ、「時代」の制約を超える理想としては、なお有効性を保

っているのだろう。けれども国境や民族を超越した「文学」という美しい理念は、『ロシアの心の中のコーカサス』が如実に示しているように、それが内包している支配の構造を、ときには隠蔽してしまうのである。(\*11)

#### 4

『ロシアの心の中のコーカサス』についてのシンポジウムから半年後の2001年11月、コーカサスをめぐるもう一つの円卓会議がモスクワで新たに開かれた。これはモスクワ市庁の協賛を得て文化基金〈コーカサスの平和〉が主催したもので、出席者の中にはファジール・イスカンデル、ニーナ・アナニアシヴィリ、アンドレイ・ビートフなどの名前があった。

この円卓会議で決議された声明文は、一見したところ『ロシアの心の中のコーカサス』の路線を踏襲しているだけのようにみえる。「現代の尖鋭化したコーカサス問題を解決する鍵は、歴史的現実を認識することである。コーカサスは多面的でかつ単一である……もしミュージが大きな声で語りだせば、コーカサスにおける砲撃は止むであろう。」

けれどもこの会議での議論は、これまで見てきたような「歴史の上書き」とも、また「文学」や「言語」の超越性への確信とも、おそらくは異質である。そう考えられるのは、参加者の個々の発言は今のところ知ることができないが、全文が公開されているモスクワ第一副市长リュドミラ・シュヴェツォヴァの席上での発言が(\*12)、「歴史」や「文化」が支配の構造を内包する危険性に対してきわめて意識的であるからだ。

たとえばシュヴェツォヴァは次のように述べている。

私たちは、歴史的にさまざまな時期に、コーカサス諸民族との相互関係というユニークで長期にわたる経験を蓄積してきました。ロシアは何世紀にも渡って、コーカサスとの相互関係に関する自分たちのイメージと自分たちの形式(свое видение и свои формы)をかたちづくってきました。

なにげないこの一節は、先に引用したヤストルジェムブスキイの序文ときわめて対照的である。後者の主体はなにか無定義な俯瞰的視点であり、そこではロシアの対コーカサス観がそのまま客観的な歴史として語られ、ロシアはコーカサスを内包していた。これに対して、上の一文の「私たちは」、ロシアという枠を越えていない。語られているのはもっぱらコーカサスについての「自分たちのイメージと自分たちの形式」——「ロシアのコーカサス表象」である。シュヴェツォヴァはこれを *свой* という語の反復によって、「客観的な歴史」とは慎重に区別している。彼女がここで述べているのは「ロシアとコーカサスの関係」ではなく、あくまでも「コーカサスに対するロシアの関係」である。

ロシアという「自己」の立場からのみ語るというシュヴェツォヴァのこの姿勢は、けっして「他者」の抹消を意味してはいない。「問題を解決する基本的な前提は、ひとつには民族の文化が維持・発展できるような条件を作り出すことです」。あくまでもロシアという「自己」についてのみ語るという営為は、そのまま「自己」が投影されない「他者」の存在——ロシアから自律したコーカサスの存在を想定することと、裏表の関係にある。したがって「混合体であるにもかかわらず、自らの内的な論理に従って展開する特定の歴史的・文化的集団、独自の社会的・エトノス的環境」であるコー

カサスは、自律的な発展を保証されるのでなければならない。

そこに住む諸民族の運命に対する、状況に通曉しないいかなる介入も、人々の成熟した精神的世界の深層の土台と活力とをガタガタにしてしまうことでしょう。コーカサスは自分自身であり続けたい、その独自性を維持したいのです。そして自尊心や民族的長所を損なわずに、同権の土台の上に他者との関係を築きたいと望んでいるのです。コーカサスに住む人々の願いはこのようなものなのですから——それは実現されなければなりません。

上のような前提に立つとき、この円卓会議の主要なテーマであった「文化」におけるロシアとコーカサスとのあるべき関係も、『ロシアの心の中のコーカサス』におけるのとは別なふうを描きだされてくる。たしかに「ロシア文学・絵画・芸術の不滅の作品が、コーカサスに現在住んでいる世代にとって、チャヴチャヴァーゼ、ガムザートフ、ハチャトゥリアン、タリヴェルグエフの作品と同じほどに価値あるものとなることを目指さなければなりません」という抱負を語るとき、シュヴェツォヴァはコーカサスにおけるロシア文化の覇権を望んでいるようにも読める。だがその一方で彼女は、別の箇所でもソヴィエト時代の文化・言語状況を称え、次のようにも述べている。

ソヴィエト時代には多民族文化が形成され、それは広範な一般大衆の財産となっていました。このことを忘れるべきではないでしょう。正当にも私たちが世界で最もよく読書する民族であると見なされていた時代を思いかえしてみましょ。何を読んでいたのかを思い出しましょう。『セメント』や『鉄の流れ』だけではありませんでした。またドストエフスキヤトルストイだけでもありませんでした。私たちがより善良で賢明で寛大にしてくれたのは、グルジアやアブハジア、ダゲスタンやタタール、アゼルバイジャンやアルメニアの作家たちでした。

ロシアという「自己」とコーカサスという「他者」とを峻別し、民族文化の伝統を強調するシュヴェツォヴァの語調は、ときにナショナリズムに近づく危険をおかしつつ、「他者」を「自己」と同権の存在と見なしている点において一線を画している。彼女はさして長くもないその発言のなかで、「ある文化の単一性、それは開かれた単一性である」「世界は多声的である」というミハイル・バフチンのテーゼにくり返し言及している。彼女が「民族」や「伝統」というとき、それは自律的であると同時に「開かれて」いるものなのだ。

本節は彼女の政治的な信条や立場は視野に入れていない。また、この円卓会議のプロジェクトが実際にどれほどの成果を挙げているのかは、今のところ不明である。けれどもロシアとコーカサスの関係がなお緊張している状況のなかで、首都の首長クラスの人物がこのような発言をしたこと自体、日本の場合などと比較して高く評価されるべきだろう。

## 5

「自己」がロシアという二項の一方に所属することを明確にし、そのことによってコーカサスという自己と対等かつ自律的な「他者」を想定して、自他の「対話」を図るというシュヴェツォヴァの発言は、静的な二項式を再生産するゴルディンや「ズヴェズダ」誌の路線とも、「対話」を語りなが

らそれがそのまま他者に対する自己の支配と同義になってしまう『ロシアの心の中のコーカサス』とも違っている。ここで提起されているのは、支配的な項に属する者が、その支配の構造を断ち切るためにはどうしたら良いのかという問題である。

けれども少なくとも「言語」とそれに依拠する「文学」については、彼女の主張もまた支配の構造を完全に揚棄しているとはいえないだろう。シュヴェツォヴァがある種の理想として言及しているソヴィエト時代の「多民族文化」については、なお次のような問いが残されているからだ——多民族文化における文学作品は何語で書かれ、読まれていたのか？

ソヴィエト時代、ロシア語を母語としない作家たちは、広範な読者を獲得するべく自作品をロシア語に翻訳したり、あるいは執筆言語をロシア語に切り替えたりするが多かった。その事情や苦勞については、たとえばアゼルバイジャンの作家チングス・グセイノフの、自己の経験に即した貴重な証言がある(\*13)。ステレオタイプ化して言うなら、少数民族出身の作家たちは、自分の属する文化や伝統をモチーフとして、最終的にはそれをロシア語で読めるようにすることを期待されていた。同じことを読者に即して言い換えれば、ロシア人読者の大多数は「グルジアやアブハジア、ダゲスタンやタタール、アゼルバイジャンやアルメニアの作家たち」の作品をロシア語で読むことができた一方で、グルジア語やアゼルバイジャン語やアルメニア語を母語とする者は、ドストエフスキイやトルストイやセラフィモヴィチをロシア語で読んでいたのである。

「文化の多声性」を語るシュヴェツォヴァの主張においてさえも、その多声性を保証する共通言語を想定しなければならず、それが具体的にはロシア語にほかならないという事実は変わらない。たとえば第3節に引用したケドリンの詩のように旧ソ連民族間の友好をロシア語で発言することそれ自体が、ソ連多民族文化におけるロシア語の圧倒的な優越のために、発言した当人の意識とは必ずしもかわりなく、支配の構造を帯びてしまうのである。

ではロシア語という支配的な言語文化に生まれついた者が支配の構造を揚棄するためには、いったいどうすれば良いのか。既述の円卓会議に参加していたアンドレイ・ビートフは、すでに1960年代にこの困難な問いを自らに課していたように思われる。

ビートフは1967年にアルメニアに滞在したが、そのわずか2週間の体験を『アルメニアの授業』にまとめるまでに実に2年を要している。この作品の読後感は何にか奇妙なものだ。浮かび上がってくるのは、旅行記の定石であるアルメニアの風土への賛嘆や人々との心温まる交流ではなく、もっぱら異境の地で「私」が覚える違和感、「私」とアルメニアの人々との断絶の感触ばかりである。第1章「言葉の授業」を例にとろう。(\*14)

「私」はロシアに戻ったらアルメニアについて書かねばならないのだが、アルメニアの人たちも常にそのことを意識せざるをえない。「私」が作家であり、旅行記を書く契約を出版社とすでに結んでいることを知ったある男は、ひたすらアルメニアの風物を示し始める。「アルメニアのスイカ」「アルメニアの頑固者」「アルメニアのおそろしく肥満した女性」「アルメニアのビール」「アルメニアのありふれたタクシー」……

私は最初のうちほほえみ、そのあと腹が立ったが自制した。この後どうなるかはもうわかっていた。これはアルメニアの寺院です。これはアルメニアの柱です。これはごく普通のアルメニアの警官です。この男は自分でもうんざりしないのだろうか？私はもう腹を立ててはいなかったが、彼がこんなふうに話すのはなぜなのかを考えていた。(c.23)

いうまでもなく、それは「私」がロシアの作家——文字どおり「ロシア語で書く人」だからである。「私」は、ロシア語という磁場から身を引き離そうと、少しでもアルメニア語を理解しようとし、ノートにアルメニア語とロシア語の語彙対照表の作成を試みる。だがその結果として「私」は、両言語のあいだにある音と意味のズレにぶち当たり、一種の迷宮に陥ってしまう。

(アルメニア語で)カマールは蚊(комар)では全然ない。カマールはアーチ(арка)だ。  
一方アルカはアーチ(арка)では全然ない。アルカは王(царь)だ。  
一方ツァールは王(царь)では全然ない。ツァールは木(дерево)だ。(中略)もちろん木(дерево)は堂々たる(царственно)ものではあるけれども……(c.22)

この第1章は、既にモスクワに戻った「私」がアルメニア旅行記を書き出そうとして、最初の一文に思い悩み、心のなかで自問自答するシーンで終わっている。「アルメニアは陽光あふれ、客人を心からもてなす国である」「アルメニアは熱く、受難の国である」等のフレーズを思いつきたびに、心中のもう一人の「私」が舌打ちをする。怒った「私」はもう一人の「私」に「じゃあおまえのアルメニアはどんななんだ？」と食ってかかる。

「もっとうまく言ってみろ、やってみろよ！」  
「やってみよう…… “アルメニアは私の祖国である”」  
「なるほどね。だが“私の”じゃないだろう！(не моя же!)そんなふうには書けないよ！」  
「どうして？」  
「だって俺が書いているのは、詩でも短編でもない、オーチェルク、手記なんだよ。旅行記だよ。よそ者の(чужого человека)手記、非アルメニア人の手記なんだ。手記だよ、わかるか？」  
(c.24)

「私」はこのように、「ロシア語でアルメニアについて書く」という意識に強迫観念のようにたえず苛まれており、そのような「私/я」は、アルメニアで自分が「他者/чужой」であることをつねに感じないわけにはいかない。この疎外感を克服しようとアルメニア語を勉強してみても、当然それを自分の母語であるロシア語のカテゴリーで理解しようとするため、音と意味のズレというはてしない迷宮にまよいこんでしまう。上の引用に示されている語彙レベルのズレは、けっして噛み合うことのない「私」と「他者」とのズレを象徴しているだろう。

『アルメニアの授業』は、「私」と「他者」を分かち境界を越えられない/越えない物語である。ロシア語で書く人間は、どうやっても「私」と「他者」の二項対立から脱出することができない。アルメニアの現地に身を置き、アルメニア語を勉強しても、「私」がこの「他者」に行き着くことは決してない。山中にあるアルメニアの古い廃墟を見学したときにだけ、「私」はアルメニアの核心に触れたように感じるが、それは一瞬のことで、いずれにせよ「私」は早晚山を降りなければならない(『ゲハルド』c.87-95)。

このことをよく表しているのは、『アルメニアの授業』中もっとも長い章である『コーカサスの虜』(c.58-86)である。この章には2つのエピソードが描かれているが、それらは何一つ大きな事件の起こらない『アルメニアの授業』のなかでもとりわけて些細なものだ。

最初に描かれているのは、エレバンの友人宅に滞在中のある夜に、「私」が友人夫妻と、彼らの親

戚で村から遊びにきていた少女とともに、映画館に行くことになるというエピソードである。友人夫妻は急な所用でどこかへ行ってしまい、映画を見終わった「私」は友人夫妻の家に帰ろうとするが、入り組んだエレバンの街なかで道に迷う。「私」は、コーカサスの山中から来たロシア語をあまり話せない娘と二人きりで、夜の街をさまようはめになったのだ。娘はそれまで「私」と話もせず、「私」の方に目を挙げようとさえしなかったのだが、ロシア人男性と深夜の街を彷徨するというこの事態に動揺せず、街をさまよう私の後を静かについてくる。まるで「私」を心から信じ、頼っているかのように……「私」は妄想に捉われる。

「どうだろう？」と私は考えた。「アルメニアに引越し、アエリータ（娘の名）と結婚して、子供を作り、そのあと永久にこの国を去ったとしたら？彼女はその後も私を思いつづけたと知ることになるのだろうか？」(c.78)

だが、ようやく友人宅に帰り着くと、娘はまたさっきまでと同じ平静さで自室に戻り、二度と「私」と言葉を交わそうとも、「私」の方を見ようとしなかった。

続くもう1つのエピソードは、さらに些細なものだ。別の友人宅で会食中に、小さな女の子が出て来て、ロシアからのお客様のために歌をうたってくれる。「私」はそれを聞き、感動するが、歌が終わったあとで彼女を誉めようとして、自分では理解できない何かまずい言動をおかしてしまう。女の子は怒りはじめ、アルメニア語で父親に不満を言い、泣きながら部屋を出て行ってしまふ。

プーシキン、レールモントフ、トルストイの作品と同じ「Кавказский пленник」という表題を持つこの章が、ロシア文学のコーカサス・モチーフのパロディであることは見やすい。第一のエピソードは、ロシア人兵士と山岳民の娘との悲劇的な愛を描いたプーシキンとレールモントフの叙事詩の格下げされた反復であり、第二のエピソードはロシア人捕虜とコーカサスの娘との交感を描いたトルストイの小品の裏返しである。この章の最終節には「オウムたち（アンチテーゼ）」という表題がついている。「私」はロシア文学の伝統をオウムのようにくり返しているに過ぎない――。

ビートフは長編『プーシキン館』において作中人物たちにペテルブルグ神話ほかのロシア文学の伝統を反復させているが、その2年前に完成した『アルメニアの授業』において、すでにコーカサス・モチーフを「私」になぞらせていたのである。「オウムたち」の一人である「私」は、ほとんど絶叫する。

私は籠のなかにいる――誰もが私を見ている。いや、これは彼らがみな籠の中から、私の方を見ているのだ！あたかも私の方が外から見ているようだ。私が皆を欺いたのだ……(c.85)

『アルメニアの授業』を半ばまで書き上げたとき、「私」は自分が「すでにアルメニアにいるのもなく、またロシアにいるのでもなくて、ただこの本の中を旅しているのだということ」に気づく(c.86)。けれども「私」はこの本をロシア語で書いているのである。「私」は「ロシア文学」「ロシア語」など何重にもなった籠からどうしても出ることができない。いや正確にはいえばむしろ逆に、「ロシア」に属する「私」の方が、十重二重に「コーカサス」を取り囲んでいるのだ――まだ民族問題が尖鋭化していなかった1960年代に、既にこのような文章を書いていたビートフの先駆性には、やはり驚嘆しないわけにはいかない。

ゴルディンらの「歴史の上書き」と『アルメニアの授業』とは、たしかに「ロシアーコーカサス」

という二項式に基づいている点では等しいけれども、その式に対する編者／著者の姿勢は対照的である。ゴルディンが二項式を固定化しようとするのに対して、ビートフは「ロシア」という二項式の一方に身を置き、もう一つの項に向けてぎりぎりまで内部を動いていく。だが彼は、閉じ込められたオウムのように、その籠から外には出られない——正確に言えば、出ない。もし籠から出て架け橋を渡れば、それは橋がロシア語でできているがゆえに、コーカサスへの「上書き」「侵略」となってしまうからだ。

ビートフは1989年に出た『アルメニアの授業』の伝語訳への序文のなかで、20年前には書かなかったあるエピソードを紹介している。レストランでアルメニアの民謡を聞いた「私」は、「自分の全感情が他者の祖国への愛情に満たされたこと」に満足しつつ、「おお、なんてすばらしいんだ！」と感嘆の叫びを挙げる。すると同席していたアルメニア人が冷ややかにこう言った——「どうしてあなただけがそう感じていると思うのですか？」この逸話を紹介したあとで、ビートフは次のように書いている。

それは突然で残酷だった。私は涙を拭いた。私は当時腹立たしかった。  
今では私は彼の言葉の意味がわかる。  
歓喜することもまた侵略なのだ。一種の戦車なのである。(c.12)

ビートフは1980年の『グルジアのアルバム』以降、コーカサスを真正面から主題に据えた作品を刊行していないが、その一方で上述<コーカサスの平和>主催の円卓会議に参加するなどの活動を示している。あたかも二項対立のテキストを臨界線まで行き着いた後の「対話」は、その外で行われると考えているかのように、それは「対話」が現在進行形の営為であるからだろうか。

## 註

1. Ева Лисина, «На качелях перед боем: чеченский дневник», Дружба народов, 1995, №2, с.103-117.
2. Сергеев П.Н., «Чечня 1994-2000: Армия России против бандитов. Военно-техническая серия №136», Кировское общество любителей военной техники и модернизма, 2001.
3. Ф.Ф.Торнау «Воспоминания русского офицера», АИРО-XX, 2002. / К.Самойлов «Заметки о Чечне», Akademia, 2002.
4. たとえば Казбек Султанов, «Национальное самосознание и ценностные ориентации литературы», ИМЛИ РАН, «Наследие», 2001. / Владимир Дегоев «Большая игра на Кавказе: история и современность», Русская панорама, 2001. など。
5. Звезда, 1995, №12, с.137.
6. Яков Гордин «Кавказ: земля и кровь. Россия в кавказской войне XIX века», Журнал «Звезда», 2000. / «Осада Кавказа: Воспоминания участников кавказской войны XIX века», Журнал «Звезда», 2000. / «Россия и Кавказ: сквозь два столетия», Журнал «Звезда», 2001. / «Кавказская война: истоки и начало. 1770-1820 годы. Воспоминания участников Кавказской войны XIX века». Звезда, 2002.

7. «Кавказ в сердце России: на вопросы современности ответы ищем в истории», Изд-во «Пашков дом», Фонд им. И.Д.Сытина, 2000.
8. このシンポジウムにおける論議の大枠は、[http://www.pereplet.ru/text/dorin\\_kavkaz.html](http://www.pereplet.ru/text/dorin_kavkaz.html), (публикацию к печати подготов. Александр Дорин) で知ることができる。以下、シンポジウムからの引用は上記に基づく。
9. Монитор. Выпуск первый. 29.11.2000. (<http://old.polit.ru/monitor//00/1100-4/291100-1.htm>)
10. Susan Layton «Russian Literature and Empire: Conquest of the Caucasus from Pushkin to Tolstoy», Cambridge Univ. Press, 1994.
11. 本稿は、ソ連インテリゲンチヤの「文学」や「文化」に対する絶対的な信頼について、袴田茂樹『文化のリアリティ：日本・ロシア知識人 深層の精神世界』（筑摩書房、1995年）に多くを依っている。私はソ連インテリゲンチヤのこの特性に批判的だが、その一方で、たとえば袴田氏も引用しているベルゴリツの自伝中の次のような一節を読むとき、やはりある種の感動を禁じえない。「なおも信じたいのである。……古井戸ばかりでなく、わたしたちの時代に生まれ、コンクリートですっきりとかたく固められた新しい井戸、古い井戸とはくらべようもないほど深い地底にいきおいよくはいりこんでいて、古い井戸には夢にもおよばない静かな、暗い水鏡をたたえている星の井戸の数々があるということ」(上掲書 109 ページに依る)。
12. この円卓会議に関しては、Людмила Швецова, «Культура на тропе мира: Кавказ как объект и субъект искусства», Русский журнал. Новости культуры. Все дискуссии “Новости культуры“. Московская афиша. に依る。なお上記については楯岡求美氏から教示された。記して感謝する。
13. Чингиз Гусейнов, «О двуязычном художественном творчестве: история, теория, практика (заметки двуязычного прозаика)», Вопросы литературы, 1987, №9, с. 79-112.
14. Андрей Битов, «Уроки Армении», Империя в четырех измерениях. III. Кавказский пленник. Фолио (Харьков), ТКОО АСТ (М.), 1996. с.7-134. 以下、引用末尾の数字はこの版のページを示す。